地方独立行政法人化記念 県美＋愛陶コレクション企画

コレクション、往来！

愛知県美術館 展示室 5｜24 April – 21 June 2026

2026 年 4 月から、愛知県美術館と愛知県陶磁美術館は「地方独立行政法人愛知県美術館機構」による運営となりました。これを記念して、ジャンルの異なる両館のコレクションを取り合わせた特集展示を行います。二館が共に歩み出すにあたり、異なる文化との出会いをテーマに、物や情報が地域や時代を越えて行き交うさまをご紹介します。

特集前半では、ヨーロッパから見た東アジアや古代の姿をご紹介します。16 世紀以降、ヨーロッパ諸国が中国や日本から買い付けた陶磁器は、シノワズリ（中国趣味）やジャポニスム（日本趣味）といったブームのきっかけを作りました。実際に訪れるのが難しい異国の地は、当時のヨーロッパにどのような刺激を与えたのでしょうか？また、同じく旅することができない古代の世界の姿が、18 世紀半ばからの各地での遺跡発掘などを通じて見えてきたとき、人々はそれをどのように捉えたのでしょうか？

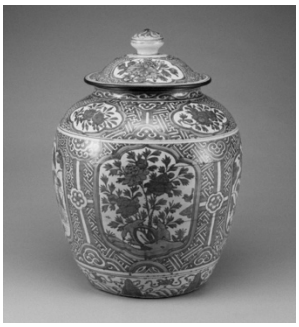
特集後半では、朝鮮半島や中国をめぐる物や情報の往来を辿ります。古くから、日本にとって物や情報の多くは、大陸からもたらされるものでした。明治時代以降、日本がその大陸に領土を広げていく中で、多くの歴史家や美術家たちもまた、自分たちの文化的ルーツを辿ろうと、大陸各地の遺跡に足を運ぶようになります。アジア・太平洋戦争の最中、そして戦後の国交回復に至るまで、日本は大陸の文化をどのように見つめてきたのかをご紹介します。

I. ヨーロッパが出会った東アジア

◆

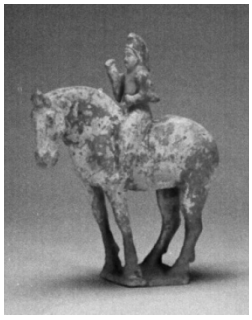
16 世紀にポルトガルが中国陶磁を大量に買い付けはじめると、オランダの東インド会社など、ヨーロッパ諸国もこぞってその市場に参入しました。こうして中国の美しい美術工芸品が広く流通すると、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、そのデザインや技術を真似て楽しむシノワズリ（中国趣味）が、王侯貴族の間で大流行します。さらに 19 世紀後半になると、ヨーロッパ各地で開催された万国博覧会で、日本政府が美術工芸品を積極的に紹介したことで、今度はジャポネズリ／ジャポニスム（日本趣味）が大きなブームを巻き起こしました。もちろん、この時代に実際に中国や日本を訪れることができたヨーロッパ人は少なく、多くの人にとっては理想化された憧れの地でした。

本章では、中国の景徳鎮（けいとくちん）窯や日本の有田窯のやきものが、ヨーロッパの陶磁器にどのような刺激を与えたのか、そして 20 世紀の画家たちが「東洋的なもの」をどのように描いたのかを紹介します。


1

2

3


4

作家名／窯名／出土地など	作品名	制作年	技法素材	備考 ※グレー網掛けは愛知県陶磁美術館蔵
モーリス・ドニ	花飾りの舟	1921 年	油彩、画布	
コンスタンチン・テレスコヴィッチ	屏風の前の日本女性	1966-67 年	油彩、画布	
3 エミール・ノルデ	静物 L（アマゾーン、能面等）	1915 年	油彩、画布	
4 中国	加彩騎馬俑（よう）	唐時代（7-9 世紀）	陶	伊藤喜代志氏寄贈
2 グスタフ・クリムト	人生は戦いなり（黄金の騎士）	1903 年	油彩・テンペラ・金箔、画布	トヨタ自動車株式会社からの寄附金による購入
1 景徳鎮窯（中国・江西省）	青花牡丹文有蓋壺（せいか ゆうがいこ）	明時代後期（16-17 世紀）	磁器	伊藤和子氏寄贈
景徳鎮窯（中国・江西省）	青花芙蓉手盤（ふようで）	明時代後期（16-17 世紀）	磁器	中島武則氏寄贈
有田窯（佐賀県）	染付芙蓉手花篭文大皿	江戸時代中期（18 世紀）	磁器	
デルフト窯（オランダ）	藍絵（あいえ）芙蓉手花鳥文盤	17 世紀後半	陶	
有田窯（佐賀県）	色絵菊文壺	江戸時代中期（18 世紀）	磁器	
チェルシー窯（イギリス）	柿右衛門（かきえもん）写（うつし）色絵壺	19 世紀	陶	
デルフト窯（オランダ）	柿右衛門写色絵壺	18-19 世紀	陶	

II. 近代から見た古代世界

◆

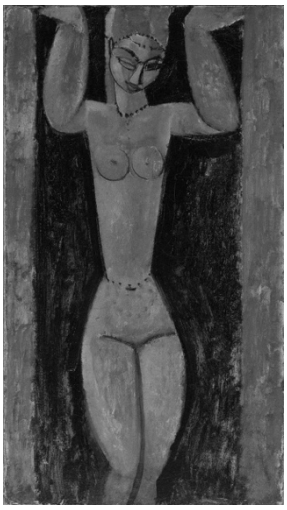
理想化された憧れの地になり得るのは、地理的に遠い場所ばかりではありません。時を遡（さかのぼ）った古代の世界もまた、実際に身を置くことができないが故に、人々の憧れをかき立てました。18 世紀半ば、古代ギリシアの芸術を最上の美と位置付けたドイツの考古学者ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンをはじめ、ヨーロッパ諸国の歴史家たちは、古代遺跡の発掘成果を美術の源流として歴史の中に組み込もうとしました。こうして、美術の歴史の語られ方は、それまでの優れた芸術家の伝記を集めたものから、自分たちの文化的なルーツやアイデンティティを形作るための近代的な「美術史」へと、徐々に変化していきました。

ヨーロッパで誕生したこの美術史という考え方を取り入れた日本の明治政府は、欧米とは異なり、大陸から優れた文化を受け継いで独自の発展を遂げた日本美術という通史を編み上げようとしました。

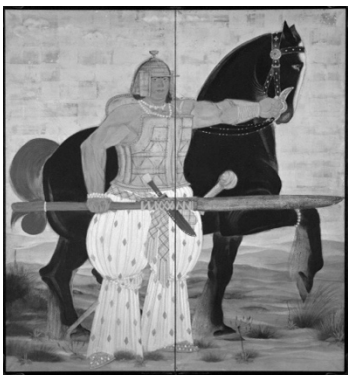
1

2

3


4

5


6

1 エドワード・ジョン・ポインター	世界の若かりし頃	1891 年	油彩、画布	
	アストラガリ	現代	偶蹄目の距骨（きょこつ）	個人蔵
2 アピュリア（現プーリア州、イタリア）	赤像式スキュフォス	マグナ・グラエキア時代（紀元前 4 世紀）	陶	玉井良胤氏寄贈
3 ハンス・コパー	スペード・フォーム	1971 年	陶	
4 アメデオ・モディリアーニ	カリアティード	1911-13 年	油彩、画布・板	
ポール・デルヴォー	こだま（あるいは「街路の神秘」）	1943 年	油彩、画布	
レオノーラ・キャリントン	ウルでの狩り	1946 年頃	油彩、画布	東清志・悦子氏寄贈
エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー	グラスのある静物	1912 年	油彩、画布	
尾沢辰夫	鴨	1938 年	油彩、画布	
平凡社	『世界美術全集』第一巻	1928 年	書籍	愛知県美術館アートライブラリー
5 伝 鶏塚（にわとりづか）古墳出土（栃木県）	埴輪（琴を弾く男子）	古墳時代後期（6 世紀）	埴輪	
6 福田恵一	大山守	1929 年	紙本着色	桑原幹根氏寄贈

III. 発見、再現、ルーツ探し――東アジアの文化往来

◆

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、中国の清朝は、列強各国との戦争に相次いで敗れました。その混乱に乗じて領土や資源を得ようと、各国は外交・諜報戦を繰り広げると同時に、中国や中央アジアに学術調査と情報収集を兼ねた探検隊を送り込みます。調査で得られた出土品や古美術品の一部は、政情の不安定な中国から海外に流出しました。

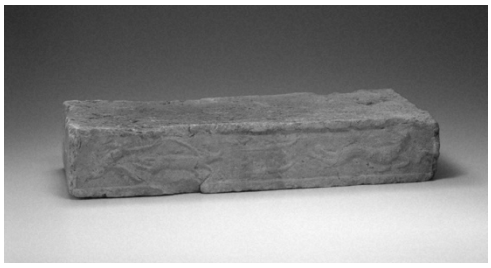
市場に出回った出土品や古美術品は、それまで大陸から舶来した茶道具などを「唐物（からもの）」と呼んで珍重してきた日本人のものの見方を変え、実用ではなく美的な鑑賞のためのコレクションを生み出します。また歴史の研究方法も、文献ばかりを頼るものから、実際の「もの」に基づいたやり方へと変わっていきました。こうした変化は、アジアの東のはてに位置する日本の文化が、朝鮮半島から中国、中央アジアやインド、そして西アジアへと繋がっていることを、日本人に強く意識させます。そのことを自分の目で確かめようと、日本の歴史家や美術家たちは、こぞって大陸各地の史跡へと向かったのです。

1. 楽浪（らくろう）郡の遺跡調査

鎖国中の朝鮮王朝（李朝）に開国を迫った明治政府が、1876 年に日朝修好条規を結ぶと、欧米諸国も朝鮮と相次いで同様の条約を結びました。その後、朝鮮の支配をめぐる日清戦争で中国・清朝に勝利した日本は、1897 年に朝鮮を大韓帝国（韓国）として自立させます。この頃から、欧米が権利を得て行った鉄道工事に伴う遺跡の発見や盗掘などによって、高麗青磁をはじめとする出土品が、日本を含む海外に多数流出しました。そのような中、日本は韓国への支配を徐々に強め、1910 年にはついに韓国を併合します。こうした状況の下で、東京帝国大学が派遣した歴史家を中心に、日本は半島各地で活発な発掘調査を行いました。

楽浪郡とは、現在の北朝鮮の首都・平壌（ピョンヤン）の郊外に、中国が前漢から西晋の時代にかけて設置した衛星都市です。中国から派遣された高官を埋葬した古墳などから、漆器、木製品、青銅器、陶器などが出土しており、これらは朝鮮文化のルーツとみなされました。

1


2

2. 民藝運動と朝鮮

日韓併合と前後して、考古学者・八木奘三郎（しょうざぶろう）や建築史家・関野貞（ただし）らは朝鮮半島各地の遺跡の調査を始めました。出土した遺物のうち、陶磁器の分野でまず注目されたのは、高麗時代（10-14 世紀）の青磁でした。東洋陶磁研究者の奥田誠一は、その独自の美しさを高く評価し、朝鮮半島の文化的な繁栄は高麗時代を頂点として、それ以降の時代は停滞あるいは衰退と見なしました。一方、「民藝運動」の創始者・柳宗悦（むねよし）は、この歴史観に異を唱えます。

1914 年、韓国で教員をしていた浅川伯教（のりたか）が、朝鮮時代（18 世紀前半）の白磁の壺を手土産に、柳を訪ねました。これに惚れ込んだ柳は、当時は雑器として誰も評価していなかった朝鮮時代のやきものに、朝鮮独自の素朴な美を見出します。そして伯教とその弟の巧（たくみ）の協力を得て、自らも韓国に渡って無名の職人が作った工芸品を買い集めました。こうした経験が、のちに民衆的な工芸に美的な価値を認める民藝運動の思想へと繋がっていきました。

3

4

5

6

3. 鉄道工事と唐三彩

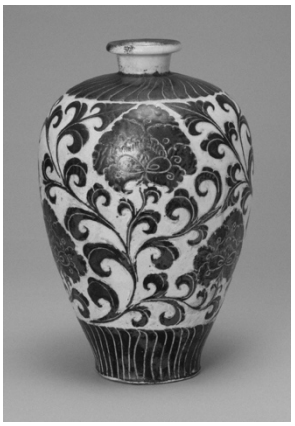
日清戦争に敗れた中国は、多額の賠償金を確保するために各国から借金をする代わりに、鉱山の採掘や、鉄道の敷設・営業の権利を引き渡しました。そうした中、河南省の二つの古都、開封と洛陽を東西に繋ぐ汴洛鉄道の敷設営業権を得たベルギーが、1904年にルート上の墳墓を取り除こうとしたところ、緑や黄、藍色の彩り豊かな陶製の人やウマ、ラクダなどが大量に見つかりました。それまで誰の目にも触れることなく眠っていたこの色鮮やかな副葬品は、1910年にロンドンのバーリントンハウスで開催された中国古陶磁展で紹介され、広く世に知られるようになります。シルクロードを介した東西の交流が盛んな唐時代に、西アジアから伝わった物を模して作られたこれらの陶器「唐三彩」は、実用ではなく鑑賞のためにコレクションされました。

8

4. 偶然の発見と磁州窯ブーム

中国・河北省邯鄲市磁県のとその周辺に栄えた磁州窯は、王族のためではなく、日常の器を作っていた民間の窯です。白や黒の釉薬をかけてから、その表面を削り取って文様を描く「掻き落とし」の技法が特徴的で、日本でも古くから愛されてきましたが、その具体的な産地や年代ははっきりと分かっていませんでした。

磁州窯が世界的に注目されるきっかけとなったのが、1920年頃に起きた偶然の発見です。河北省邢台市鉅鹿県で日照りよる水不足に悩んでいた人々が、周辺の地面を掘り返したところ、大量の陶器が姿を表します。これは、1108年に起きた河川の氾濫で、街ごと泥に埋まってしまった北宋時代の遺物でした。時が止まったかのように当時の生活の姿を伝える鉅鹿の遺跡は、イタリアの古代遺跡になぞらえて「東洋のポンペイ」と呼ばれ、世界中に空前の磁州窯ブームを巻き起こしました。



9

5. 幻の窯、定窯を探して

温かみのある象牙色の肌に、鋭く繊細な彫り文様が施された定窯の白磁は、古くから中国陶磁の最高峰の一つとされてきましたが、その窯跡の位置は推定にとどまっていました。この「幻の窯」をついに突き止め、長年の議論を大きく前進させたのが、日本の古陶磁研究者・小山冨士夫です。

小山は、志願入隊した近衛歩兵の同僚を通じて、やきものの世界に魅了されます。除隊して瀬戸や京都で作陶を学んだのちに、朝鮮・中国陶磁の研究の道へ進みました。実業家・横河民輔の中国陶磁コレクションの整理を引き受けた縁で、横河から資金の援助を受けた小山は、1941年、日中戦争が長期化する中、定窯を探す旅に出ます。目指す河北省保定市曲陽県の奥地は、中国共産党（八路軍）の勢力下にある危険な地域でした。小山は付近に駐屯する日本軍の部隊のトラックに便乗させてもらい、両軍の銃弾が飛び交う夜明け前の暗闇の中、ついに念願の窯跡を発見し、1,100点あまりの陶片を収集しました。

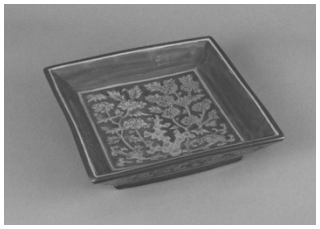
10

6. 日本人による中国陶磁再現

近世以降に普及した茶道文化において、大陸から舶来した茶碗や茶入は「唐物」として珍重され、伝来や箱書（極）を重視する価値体系の中で賞玩されました。しかし、明治から大正時代にかけて、旧家の売立や中国での鉄道敷設等に伴う出土品の流通により、多くの人が中国陶磁の実物に接するようになります。陶磁研究者やコレクターは、それらの観察・研究を通じて、従来とは異なる考古学的・美術史学的な価値観を打ち立てました。

同時に、陶磁製作にも科学的知識に基づく近代的な窯業技術が導入されます。京都市陶磁器試験場などの研究所では、それまで経験や勘だよりだった技術を、原料の分析や実験を通じて再現可能なものへ変えていきました。同試験場技師の小森忍や後輩の河井寛次郎や濱田庄司は、中国陶磁の主な釉薬を一万種もテストして、研究を深化させました。

小森らの研究は、次世代の陶芸家にも大きな影響を与えます。伝統的な価値観と近代窯業の知見、学術的な認識が交差する中で、日本人は様々な中国陶磁を再現していったのです。



11

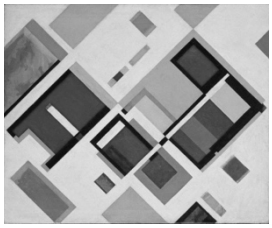
12

7. 画家たちが見たアジア

江戸時代までの日本では、大陸から伝来した絵画を手本にして、大陸の風景や人物、花鳥などを描いてきました。では、明治時代の開国以降、実際に大陸を自らの目で見ることのできた画家たちは、どのようにその姿を描いたのでしょうか？

1910 年の日韓併合をきっかけに朝鮮半島に渡った藤島武二や前田青邨は、日本では失われていた古代の名残りをそこに見つけました。また、早くにフランスで絵を学び、帰国後にどのような絵を描くべきか迷っていた安井曾太郎は、1932 年に日本が中国の東北三省に建国した満洲国で、その才能を開花させます。同じようにフランスで学んだ梅原龍三郎を、スランプから救ったのは、北京の風景でした。日本の洋画はヨーロッパのまねごとに過ぎない、と悩んだ安井や梅原は、日本の文化のルーツとしてアジアを描くことによって、初めて日本独自の洋画が生まれるのだと考えたのです。

13


14

8. 中国陶磁の起源

1914 年に、資源調査のアドバイザーとして中国の北京地質調査所に招かれたスウェーデンの地質学者ユハン・アンデショーン（英語読みではアンダーソン）は、1921 年に河南省澠池県仰韶村で、黒や赤、白の鮮やかな文様が描かれた彩文土器を発見しました。中国ではそれまで見つかっていなかった新石器時代のこの土器は、中国陶磁史の幕開けを告げるものとして、世界中を驚かせました。当時、アンデショーンはこの技術が西アジアから伝わったと考えましたが、その後の発掘調査で、中国で独自に花開いた文化であることが判明しています。近年の放射線を用いた測定により、これらは BC5000-3000 年紀頃に作られたことが分かっています。

日本では、発見者の名をとって「アンダーソン壺」の愛称で親しまれ、その力強いデザインは茶人・松永耳庵ら著名なコレクターや、画家の三岸節子といった芸術家たちにも愛されました。

15

16

9. 日本のルーツを求めて

現存する世界最古の木造建築として知られる奈良県の法隆寺金堂。その内部には、かつて飛鳥・奈良時代の輝きを伝える美しい仏教壁画が描かれていました。明治時代、仏教排除の動き（廃仏毀釈）による文化財の破壊や海外流出を防ごうと、国による文化財調査を行った岡倉覚三（天心）らは、この壁画の重要性にいち早く注目しました。なぜなら、その仏画の表現には、同時代の中国・唐代のスタイルだけでなく、はるか遠くインドのアジャンター石窟の壁画とも共通する技法が見られたからです。日本の仏教美術のルーツを辿ると、朝鮮半島や中国を経て、源流であるインドへと繋がっている――。この壮大な歴史の連なりを自分の目で確かめようと、日本の歴史家や画家たちは熱い思いを胸に大陸各地の遺跡へと旅立っていきました。

17

18

10. 国家プロジェクトとしての写し

明治元年の神仏分離令や西洋重視の風潮により、優れた古美術品が失われることを恐れた政府は、記録のための写しを作るようになりました。帝国博物館の岡倉覚三（天心）らは、こうした古美術品を「国の精華」と位置付け、日本独自の美術史を編んでいきました。写しの対象には、現物の収蔵が難しい巨大な仏像や壁画も、多く選ばれています。

1916 年、国は海外にある壁画の模写事業を立ち上げ、インドのアジャンター石窟壁画などの模写が行われました。1940 年には、日本画家の荒井寛方、中村岳陵、入江波光、橋本明治を中心とする法隆寺金堂壁画の模写事業も始まりましたが、1949 年、壁画は火災で失われてしまいます。その後、1968 年に朝日新聞社による再現模写が行われました。

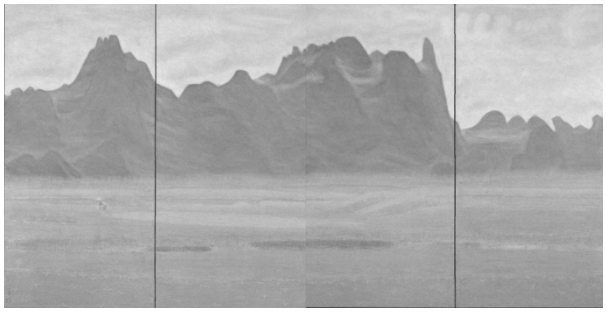
奈良時代、聖武天皇が創建した東大寺の倉庫（正倉）に伝わる約 9,000 件もの宝物もまた、明治政府の管理下で修理や模造が行われ、人々の注目を集めました。模造事業は、戦争での中断を挟んで、1972 年から現在も続いています。

19

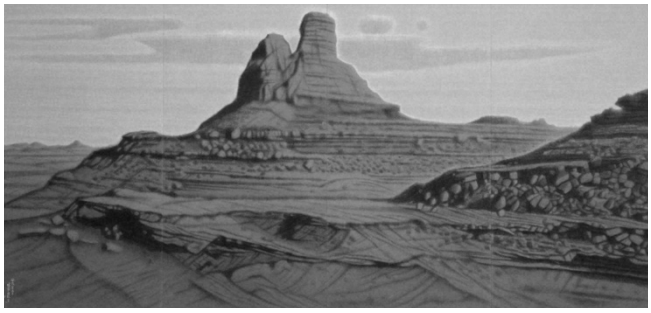
11. 日中国交正常化とシルクロード

戦後、日本はアメリカとの同盟関係から台湾（中華民国）と国交を結んだため、1949 年に誕生した中華人民共和国とは、長く公式なつきあいがない状態が続きました。東京五輪を半年後に控えた 64 年、日本からの海外旅行が自由化されると、海外での学術調査も盛んになりますが、シルクロードの重要拠点である中国国内の遺跡や史料については、引き続き情報が乏しいままでした。

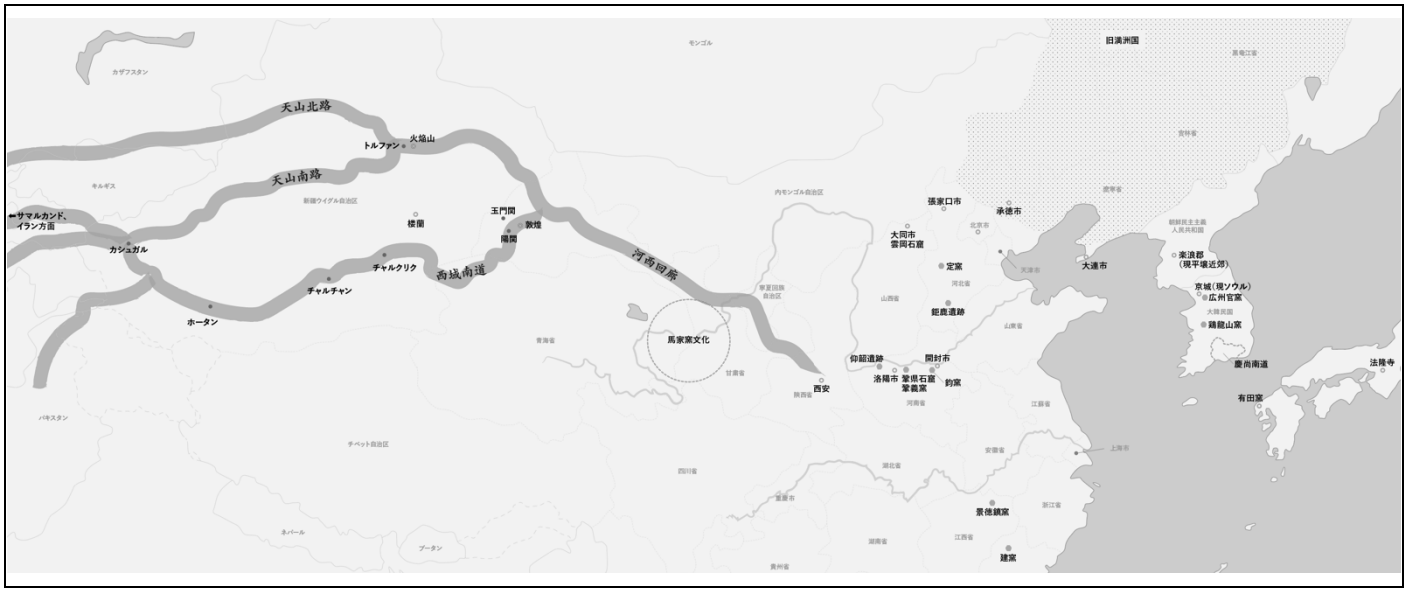
ところが 71 年、アメリカのニクソン大統領が突如中国との関係改善を発表して、世界を驚かせます。これが転換点となって、翌 72 年には田中角栄首相が、日本の総理大臣として戦後初となる中国訪問を果たし、日中国交正常化を実現しました。これをきっかけに、止まっていた文化交流も活発化し、テレビドラマ「西遊記」（78-79 年）やドキュメンタリー「シルクロード 絲綢之路」（80-81 年）などの放送が、お茶の間に空前の中国西域ブームを巻き起こします。75 年、日本美術家代表団の一員として訪中した日本画家の平山郁夫も、砂漠をゆくキャラバンなどを幻想的に描き、シルクロードへの憧れを日本に広めた一人です。



20



21



	伝 楽浪郡出土（北朝鮮）	衣環	漢時代	石	木村定三コレクション
	伝 楽浪郡出土（北朝鮮）	衣環	漢時代	石	木村定三コレクション
1	伝 楽浪郡出土（北朝鮮）	細線式獣帯鏡	前漢時代（紀元前 1-1 世紀）	銅鋳造	木村定三コレクション
2	伝 楽浪郡出土（北朝鮮）	塼（狩猟文）	後漢時代	陶	木村定三コレクション
3		釘彫伊羅保茶碗 銘「高雄」	朝鮮時代（17 世紀）	陶	木村定三コレクション
	浅川伯教	伊羅保茶碗 銘「蛍雪」	1941 年	陶	辻清明コレクション
	鶏龍山窯（韓国）	粉青鉄絵草花文瓶	朝鮮時代（16 世紀）	陶	野口敬仔氏寄贈
	韓国	粉青沙器印花象嵌瓶 銘「会釈」	朝鮮時代	陶	辻清明コレクション
5	広州官窯（韓国）	白磁扁壺	朝鮮時代（16 世紀）	磁器	野口敬仔氏寄贈
6	濱田庄司	鉄砂筒描扁壺	制作年不詳	陶	水谷三郎氏寄贈
	河井寛次郎	白地草花絵扁壺	1939 年頃	陶	加藤慶郎氏寄贈
4	前田青邨	朝鮮五題 水汲	1939 年	紙本墨画淡彩	木村定三コレクション
7	エウダル・セラ	鯉のぼり『日本・韓国の 5 つのスケッチ』より	1940 年	木版、紙	
	エウダル・セラ	韓国の女性『日本・韓国の 5 つのスケッチ』より	1940 年	木版、紙	
	エウダル・セラ	洗濯物『日本・韓国の 5 つのスケッチ』より	1940 年	木版、紙	
	エウダル・セラ	韓国の男性『日本・韓国の 5 つのスケッチ』より	1940 年	木版、紙	
	エウダル・セラ	夕暮れ『日本・韓国の 5 つのスケッチ』より	1940 年	木版、紙	

	鞏義窯（中国・河南省）	三彩武人俑	唐時代（8 世紀）	陶	個人蔵（愛知県陶磁美術館寄託）
	鞏義窯（中国・河南省）	唐三彩馬	唐時代（8 世紀）	陶	個人蔵（愛知県陶磁美術館寄託）
8	鞏義窯（中国・河南省）	三彩鍑	唐時代（8 世紀）	陶	
9	磁州窯系（中国・華北地域）	白地黒掻落梅瓶	北宋時代（11-12 世紀）	陶	小川徳男氏寄贈
	匋雅堂窯（中国・遼寧省）／小森忍	白地黒掻落草花文壺	1921-28 年	陶	堀田毅氏寄贈
	石黒宗麿	白地黒絵双魚盆	1940 年頃	陶	川崎音三氏寄贈
10	定窯（中国・河北省）	白磁印花蓮花文盤	北宋-金時代（11-12 世紀）	磁器	
	塚本快示	白磁水禽文大皿	1970-79 年頃	磁器	
	塚本快示	白瓷牡丹文輪花鉢	1978-81 年頃	磁器	
	匋雅堂窯（中国・遼寧省）／小森忍	建盞（天目茶碗）	1921-28 年	陶	堀田毅氏寄贈
	匋雅堂窯（中国・遼寧省）／小森忍	辰砂花文花入	1921-28 年	磁器	堀田毅氏寄贈
12	加藤土師萌	辰砂釉華文飾壺	1929 年	磁器	
11	加藤土師萌	黄地紅彩菊牡丹文角鉢	1954 年頃	磁器	川崎音三氏寄贈
13	安井曾太郎	承徳喇嘛廟	1938 年	油彩、画布	
	梅原龍三郎	北京紫禁城	1939 年	油彩・岩絵具、紙	
14	村井正誠	Cité B	1940 年	油彩、画布	
15	中国・甘粛省	彩陶双耳壺	新石器時代後期・馬家窯文化（紀元前 23-21 世紀）	陶	小川徳男氏寄贈
16	加山四郎	枯れたる花	1953 年	油彩、画布	
17	木村荘八	雲岡石窟拓本	1920	紙本拓版	藤井達吉コレクション
	木村荘八	鞏県石窟拓本	1920	紙本拓版	藤井達吉コレクション
	鶴田吾郎	張家口にて	1937 年	コンテ、紙	
	宮田重雄	微笑佛	1940 年	油彩、画布	宮田節氏寄贈
	杉本健吉	大同石窟	1982 年	鉛筆・クレヨン・パステル・水彩、紙	杉本武氏寄贈
18	山中雪人	雲岡石仏	1984 年	紙本着色	
	森田沙伊（沙夷）	森田沙伊から木村定三宛書簡	1941	インク、葉書	木村定三コレクション
	橋本明治	橋本明治から木村定三宛書簡	1960	インク、便箋	木村定三コレクション
19	加藤卓男	三彩花器「豊容」	1989 年	陶	水野靖弘氏寄贈
	加藤卓男	藍彩貼文手付花入	1994 年	陶	水野靖弘氏寄贈
	加藤卓男	ペルシャ三彩人面獣文鉢	1993 年	陶	水野靖弘氏寄贈
	イラン	多彩釉刻線文鉢	9-10 世紀	陶	加藤舜陶氏寄贈
	イラン	ラスター彩騎馬人物図鉢	12-13 世紀	陶	
	イラン	ラスター彩植物文杯	12-13 世紀	陶	西垣千代子氏寄贈
	加藤卓男	ラスター彩植物文杯	制作年不詳	陶	西垣千代子氏寄贈
20	吉田善彦	雨余桂林	1982 年	紙本着色	
	松本哲男	火焔山残照	1985 年	紙本着色	
21	平山郁夫	楼蘭の遺跡・昼	1990 年	紙本着色	林軍一氏寄贈
	ルーチョ・フォンターナ	空間概念	1960 年	水性絵具、画布	
	ルーチョ・フォンターナ	空間概念	1956 年	陶	
	秋山陽	Pho II	1990 年	陶	
	秋山陽	準平源 921	1992 年	陶	

担当・執筆｜副田一穂（愛知県美術館企画普及課長）、入澤聖明（愛知県陶磁美術館学芸員）
2026 年 4 月発行
愛知県美術館